Twinkle 東京女子医科大学学術リポジトリ
Tokyo Women's Medical University - Information & Knowledge Database
https://twinkle.repo.nii.ac.jp

(特集オンライン座談会 ニューノーマル時代の看護学教育-演習・実習の新たな展開- 2.「座談会」)-ディスカッション

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-05-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小川, 久貴子, 見城, 道子, 諏訪, 茂樹, 吉田, 澄恵, 原, 三紀子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.20780/00033170

2．「座談会」―ディスカッション

小　川：皆様、本日はお集まりいただき誠にありがとうございます。モデレーターを務めさせていただきます、小川です。皆様の貴重なご報告から、コロナ禍を契機とする展望や課題が、さまざま見えてきたように思います。これらを軸として、「ニューノーマル時代の看護学教育」について、存分に語っていただきたいと思います。

吉　田：原先生のご発言から、オンラインだと学生一人一人に熟考するチャンスがあることに気付きました。これが集合型との違いですね。原先生のようなメッセージ力のある先生が対面と遠隔のハイブリッドでやると、集団のクラスでやるよりも、学生にとっては、教員との1対1のコミュニケーションのように感じられるのかなと思いました。

見　城：こちらでも事例演習をしましたが、学生が自分で患者の情報を取るという能動性の大切さに改めて気づきました。こちらから事例提供をすると積極性がなかなか養われない。だから、事例演習で自分がどこの情報を見ればいいのかを考える訓練も大事だと思いました。

また、原先生のお話から、学生を取り巻く環境の変化について考えさせられました。大東キャンパス（現、掛川キャンパス）では学生の9割近くが一人暮らしで、不便な場所でお互い協力しないとやっていけない環境だった。そこでは、学生同士のものすごく濃密な関係ができて、いろんなぶつかり合いの中で育っていったものもあったと思います。

これに対して、新しいキャンパスでは、ほとんどの学生が実家通学で、「洗濯をしたことがない」と言う学生もいます。大東キャンパスでは生活の中での段取り力なども養われていて、それが看護に繋がっていた部分もあったように思います。そういうところが今後どうなっていくのか気になりますね。

もう一つ、コロナ禍になった去年の1年生たちは、受験や部活での切磋琢磨とか悩みがあって、〔課題で出した〕プロセスレコードにもそういう内容が出てきていました。でも今年は、「最近人と話したのはいつか思い出せない」と書いた学生が20人位いたんです。書く内容も乏しくて、本当に人と話していないんだなあって思いました。今年の1年生は去年の1年生と全く違う環境で学び、生活してきています。そうした学生の背景をどうやって知っていけばいいのか･･･。

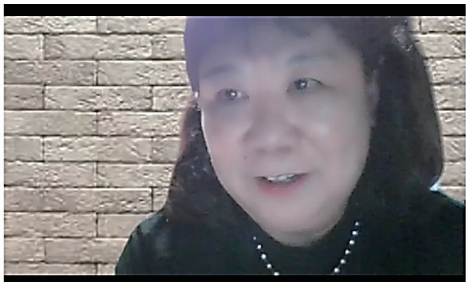
諏　訪：あと、女子医大の医学部のサークルは活動が続いていますが、看護学部は大東キャンパスのサークルがなくなって、新キャンパスでもコロナ禍で新たな活動ができなくなりました。だから残念ながら、そういう縦の関係も、すごく今希薄になっています。そういう意味でインフォーマルな関係ができていない。それで親密な関係が作れなくて、孤立や孤独というメンタルな問題が出てきているんです。それはネガティブな側面です。

でも、実はポジティブな側面があったんです。それは何か。

看護の学生は、初対面で会った患者さんと信頼関係を築かないといけない。今の学生は、それにチャレンジできるんです。学生は初対面が苦手です。だから、Zoom ミーティングのブレイクアウトルームをわざとランダムに作って、患者役と看護師役で傾聴のトレーニングをやったりします。ほとんど会ったことのない相手の話を聞き、うなずいたり相槌を打ったり、共感したりするトレーニングができるんです。それが仲のいい友達同士だと逆にうまくいかないんです。

原：心が動く、人と接する喜びっていうところは絶対重要で、それを経験しないで卒業する学生が世の中には結構いるんだと思います。そこをすごく大切にしてほしいですね。諏訪先生の試みは、本当にリアルタイムで必要なことです。Zoom でのよい例も、どんどん伝えて欲しいと思いました。

また、吉田先生の教材には脱帽です。素晴らしいですね。共有の場の持ち方とか空気感をどんなふうに領域の中で伝えているのか、さらに聞きたいところです。あと、「わからない」と言えない学生たちへの背中の押し方にもすごく色々あることを知りました。



ご父母からも学生同士の交流がないという意見が出ています。そこで今年、縦の関係をつくる交流会をやったんです。そしたら意外にも学生が集まらないんですよね、20 人ぐらいでした。

吉　田：対面ですか？

原：Zoom です。4 年生がすごく協力的で、これからも継続してやろうということになりました。大学祭も Web 開催して卒業生が来たりしました。けれども、交流の機会を作ってあげても、学生がすごく怖がる感じがありました。学生が 1 人の人間としてフラットになってないような緊張感があるというか・・・。

だから教員も学生と気楽に喋れないんです。学生委員会としては、学生ともっと自由に喋れるような、学生とのフラットな関係作りを目指しています。

見　城：原先生が学生縦割り交流の機会を作ったということについて、女子医大の学生委員会でも、今年の夏休みの終わりごろに縦割りの学生交流会を Zoom でやったんです。

9 月の新学期が大変そうだというので試みたんですけど、本当に学生が集まらなくて。クラス委員を通して全員に声かけをしましたが、結局集まったのはクラス委員プラス 1 みたいな感じで・・・。全部で 12 人位でした。

そこでは「どうやったら学生の交流が活発になるか」という話が出ました。学生は、キャンパスで会う人が何年生かも、医学部生か看護学部生かも分からない。だから、ネームホルダーの紐の色を学年カラーとかにしてくれたら声をかけやすいとか、ユニフォームを着ているから看護の先輩だと思ったんだけど、なかなか声を掛けられなかった、などの話をしました。

教員が Zoom から出て学生だけになったら安心して話せる環境ができたみたいで、色々話ができて、すごく楽しかったそうです。相手がどんなことを言って、どんなことを考えているのかがわかる

と意見が言いやすい。反対に、相手の人となりや背景がわからなくて、反応がまったく予想できない中で発言するのが難しい。そういう感じでしょうか。

諏　訪：これはコロナ禍じゃなくって、大東キャンパスがなくなったことが大きいと思う。

原：私もそう思う。

諏　訪： 大東キャンパスでは、同じ釜の飯は食っていないにしても、同じ屋根の下で長く暮らしているから相互理解が進む。都市部で 4 年間過ごすと、4 年間に友達が 1 人もできなかったという学生がいっぱい出てくるんです。これが、大東キャンパスがあった時代と、これからのニュー女子医大看護学部、ニューノーマルの大きな違いですね。これにどう対応していくかということが、女子医大看護教育の課題です。

吉　田：大東キャンパスみたいな環境を手に入れられる大学は、これからはほとんど無いでしょう。むしろそれこそニューノーマルなのかなって思います。今は、こういう目的的なコミュニケーションとか目的的な情報収集っていう、非常に自己主導型の交流が促進される社会です。情報は待っているだけでは入ってこないという時代なので、能動的に動ける人や、人と繋がることに価値があることを知っている人たちは、場を共有しなくてもどんどん交流する力を持っていくし、Web も活用していくので、そんなに心配は要らないと思うんです。

　むしろ看護学を志向するような人は、他者に沿う、他者の空気に合わせて自分を変化させる、空気を読む力のような関わり方の知を持っている。そういう人は、逆に待つことや、状況を見ることができます。それは、一見能動的ではないんですけど、状況のありようを身体的に参加して見ているみたいな感じですね。そういう人たちの能力をどうやって伸ばしていくかというのが、自分がイニシアチブを取らないと参加できないようなオンラインのコミュニケーションでは厳しいと思っています。

見　城：一昨年度まで看護学部で行っていたナーシング・ヒューマン・リレーション（NHR）という科目がありました。3 年生が計画して 2 年生がそれを実行して、1 年生をもてなすという縦割りプログラムです。3 学年が小グループを作って、ゲームとかをやりながら看護観やキャリアの話をするんです。交流会に参加した学生は、そういう安心して先輩と話せる機会をすごく続けて欲しかったようなことは言っていました。

　今回の交流会では、全看護学部生に声をかけましたが、後で学生に聞いてみたら、すごく困っている学生が参加するものだと思っていたようで、自分は該当者じゃないと考えた人もいたようですね。

吉　田： 大東キャンパスという共通点があったので、NHR でも学年を超えたコミュニケーションが取りやすかったんですよね。

　うちの大学では逆に、開学したばかりで縦はそもそもないので、縦を作っていくこと自体が、初め

から課題だったんです。

小　川：縦の関係も何もない状態からですね。

吉　田：初めて開学したので、縦も意識して作らないとできないことは分かっていたので、アドバイザーを集めて対面でやるとか、学生が欲しい情報をメッセージしてやったらできるんじゃないか、とか思っていたんです。

ですけど、今年 4 年生が初めて就職活動をしたので、就職活動や国試の勉強などについて 4 年生に聞く会というのを、3 年生のためだけに設けたんです。そしたら、今まで学生は、そういう集まりにほとんど来なかったのに、111 人中 108 人参加したそうです。

なので、縦の交流を教員側が用意する場合は、Zoom という場では、意図的な集会の方が集まりやすのではないかと思っています。

小　川：諏訪先生、女子医大看護学部の今後の課題もみえてきましたね。学生同士の人間関係の構築が課題であることや、縦の繋がりがすごく大事であることが分かってきました。これらの課題に関連して、本学会に望むことはなんでしょうか。

諏　訪：まさにニュー女子医大看護教育が始まったわけで、そこの課題が今回明確になりました。大東キャンパスが無くなったことによる影響をどうやって乗り越えていくのか、という課題が確認できたと思います。そういう意味で、目的の明確な意図的な集まりとか、吉田先生が今おっしゃったこともすごく参考になります。

吉　田：コミュニティとか地域社会での生活感をどう学び、その中でどのように人として存在するのか。こうしたことを、女子医大では大東キャンパスがある中で保障しえていたんですね。大東で 1 年生の教育をしていたからこそ出来ていたことが出来なくなった。これからどうしたらいいのか、という呻吟を体験できるのは、今の女子医大の先生だけなんです。

それってあとにも先にも、歴史上誰も経験できないことで、それがどれだけ価値あるものなのかということと、それをどう補ったらいいのかということを提案してくれたら、都市型の大学全体にすごく大きな資産になるんじゃないかと思うんです。

今日、オプションでそのことがわかって、そして諏訪先生の分析が聞けてすごく嬉しかったです。それを呼び出してくださったのが、原先生の熱いトークだったのですごく嬉しかったです。

原：もう 1 つだけ言わせてください。女子医大病院は、特に臨床系の実習にとって大きな宝だと思います。重症度が高い患者さんを学生や大学に任せてもらえるのも信頼関係がなければできないし、そこで本当に命がけで考えないと看護ができない。難易度は高いんだけれども、そこに看護のモデルを見ることができるのではないかと思います。

吉　田：先生、それは女子医大が高度だからじゃないんですよ。東京女子医科大学っていう医学部も含めた文化ですよ、文化。

原：文化か。

吉　田：文化ですよ。難易度の問題じゃないですよ。

原：人を育てる環境があったというところで、命と向き合うという点でも、女子医大から学ぶものは本当に大きかったんです。難しい患者さんも多かったんですけども、難しいからこそ学べるものもすごくありました。

吉　田：難しくなくても雰囲気を持っているところはちゃんと学ぶ。だから女子医大の持っている雰囲気が大切なんです。難易度の問題じゃない。

原：難易度じゃないのかな。難易度かと思ったんですけど、そうではない。

吉　田：難易度じゃないと思います。女子医大の医学部生も本気で 1 人 1 人のことを考えているじゃないですか。だからオール女子医科大学の文化だと思います。

諏　訪：そこを大切にして、宝をどうまた使っていくのか、ということかな。

小　川：本当にそうですね。皆様の議論を通して、COVID-19 後のニューノーマルに加えて、新たに取り組むべき課題が見えてきたように思います。今後また、その成果についてもう一回座談会をしてもいいかもしれません。皆さんの熱い気持ちもありますので。女子医大看護学会としては、来年またこういう活動をして、記事や学術集会での特別セッションなどを設けて学内外に発信してもいいかもしれません。本日の貴重なお話を土台として、より広い活動に続けられたらと思います。

皆様、本日はお忙しいなか、東京女子医科大学看護学会誌特集「座談会」にご参加いただき、心より感謝申し上げます。いずれまた、今度は対面でお会いできる日を楽しみにしております。